



Title	フランツ・ファノンと言語 : フランス的普遍の呪縛
Author(s)	砂野, 幸稔
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2026, 37, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104444
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランツ・ファノンと言語 — フランス的普遍の呪縛

Frantz Fanon and Language: The Spell of French Universality

砂野 幸稔*

SUNANO Yukitoshi

0. ファノンにおける「断絶」

1960年代から70年代にかけてチェ・ゲバラとともに第三世界革命の実践者、思想家として一種のアイコンとされた後、いわゆる68年世代の退場とともに忘れ去られていたファノンは、1980年代後半頃から、今度は被植民者の主体問題の先駆的論者として、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル・スタディーズなど、英語圏を中心とした、植民地主義や人種主義のような現実の政治、個々の人間的現実についての、極めて思弁的で高踏的な人文研究アカデミズムの潮流の中で論じられるようになった。

ただ、植民地支配の暴力を内在化した被植民者の主体の解放の契機としての暴力論にせよ、植民地主義と人種主義によって歪められた植民地原住民の主体の問題にせよ、ファノンは、先鋭な理論家、問題の提示者として、つまり、独特の激しい文体によって晦渋さを感じさせるとしても、植民地主義と対峙する一貫した思想的立場を貫いた思想家として提示されるのが常だった。21世紀に入ってからフェミニズムやクイアの視点からファノンの男性主義的限界が指摘されるようになったが、そこでもファノンの一貫性は問題化されることはないように思える。

中村隆之の論文「フランツ・ファノンとニグロの身体 — 「黒人の生体験」再読」(中村2007)は、ファノンをある種の一貫性のなかに閉じ込めようとするかのようなそうした議論とは一線を画し、あえてファノンにおける一貫性の不在に注目し、そこに新たな意味の場所を見いだそうとする試みとして興味深い。

通例、『黒い皮膚白い仮面』は、分析者と被分析者が錯綜し、ときに語り手が自らの感情をむき出しにするような文体が多くの読者を戸惑わせるとはいえ、植民地主義と人種主義によって歪められた植民地原住民の主体の問題を鮮鋭に提示し、「ニグロは存在しない。白人も同様に存在しない」という結論に到達することで、被植民者の主体の危機を乗り越えたものと見做されるのが一般的な理解だった。『革命の社会学 (アルジェリア革命5年)』、『地に呪われた者』のファノンは、もはや他者の視線に呪縛されたマルティニック黒人ではなく、ヨーロッパの似而非普遍を見下ろす、半ば透明な、「全的人間」の告知者として語っているのだ。

* アフリカ学会会員 (Japan Association for African Studies)

それに対して中村は、『革命の社会学（アルジェリア革命 5 年）』、『地に呪われた者』のファノン、『黒い皮膚白い仮面』で被植民者の主体問題を克服した結果なのではなく、両者の間には「断絶」があるとし、さらに、その「断絶」は、『黒い皮膚白い仮面』におけるファノンの身体論／第 5 章にすでに表れているという。そして、その未解決の断絶がクレオール性、アンティル性の「物語」につながっているとみる。未解決のまま残された黒人の「身体」の問題を提示し、そこに中村がとくに高く評価するグリッサンに通じる「問題」の場所を見いだそうとするのである¹。

ファノンは『黒い皮膚白い仮面』において、マルティニック人の屈折を半ば露悪に近い文体でさらけ出した後、普遍の側から判定するサルトルに抗議の身振りを見せながら結局はそれを受け入れた。ファノンにとって、問題は乗り越えられたのではなく封印されただけだった、という指摘は正しい。ファノンはネグリチュードを弁証法の弱拍として価値づけたサルトルに反発したのではなく、サルトルの「普遍的」理性によって説得されながらも、無標のサルトルが経験することのない、有標の存在の決して消えることのない傷を癒やす手がかりを失って、「さめざめと泣いた(Fanon 1952:114)」²のである。

実は、このファノンにおける「断絶」、あるいは未解決のまま残った「傷」については、早くから異なった形で指摘されていたのだが、ほとんど取り上げられることなく看過されてきた。それについては後述する。

本稿で論じたいのは、フランツ・ファノンにおけるもうひとつの「断絶」、『黒い皮膚白い仮面』において、植民地化された者にとって根源的な重要性を持つ問題として提起されながら、解決されることのないまま封印された言語の問題である。

ファノンと言語というテーマについては、マルティニックにおける植民地ダイグロシアとそれが生み出すマルティニック人の屈折した言語意識をめぐって多くが論じられてきたが、アルジェリア革命に参加しそのスポークスマンとして語り続けたファノンが、実はマルティニックにおけるよりもはるかに根源的な重要性を持っていたアルジェリアの言語問題にほとんど触れていないことを問題化する議論は管見の限り目にしたことがない。

解放戦争が始まった 1954 年当時のアルジェリア人のフランス語学校の就学率は 10% 強であり(渡邊 2016)、その中で満足にフランス語を使いこなした者の数はさらに少なかったはずである。アルジェリア民族解放戦線 (FLN) 指導部は相対的に高い水準のフランス語教育を受けた層が中心であり、ファノンは彼らとの関係において問題を感じることはなか

¹ 中村は『思想』2025 年 2 月号において、「フランツ・ファノンー生誕 100 年」という特集を企画しているが、そこでは「ファノンにおける断絶」についての問題意識は背景に退いているように思える。ただ、ファノンの西欧近代主義を指摘する岡、「フランス語を通じてこの世界を認識し、把握し」たファノンの限界を指摘する崎山との討議で示される視点は、筆者の問題意識と共振する。(中村 2025a, 2025b, 岡、崎山、中村 2025. 参照.)

² 欧文著作、論文からの引用は拙訳によるが、邦訳のあるものについては邦訳を参照、参考にしている。

ただろうし、世界に対し、とりわけフランス国内の世論に対して、FLN の名において、したがってアルジェリア人として語ることにさほどの矛盾を感じなかったかもしれない。しかし、彼が代表しているはずのアルジェリア人の大多数は彼のことばを理解せず、彼も通訳を介さずに彼らと直接語り合うことはできなかった。

ファノンが『地に呪われた者』で指摘した指導部と民衆の乖離は独立アルジェリアの主要な矛盾となった。1990年代の「イスラーム救国戦線（FIS）」に対するFLNによる弾圧に始まるアルジェリア内戦がその表れだった。

1962年のエヴィアン合意後の激しい権力抗争の末、民族解放軍(ALN)を掌握するブーメディエンの支持を得て独立アルジェリアの権力を掌握したベン・ベッラは、イスラームを国家の宗教とし（第4条）、アラビア語を国語であり公用語である（第5条）とする憲法を採択させた³。教育のアラビア語化が本格的に始まったのは、1965年にベン・ベッラを追放して権力を掌握したブーメディエン体制下でのことだったが、大衆層にアラビア語教育が定着していく一方で、政治、経済の実務はフランス語で行われ続け、石油、天然ガスなどの利権はフランス語を話すFLN特権層が独占し、経済政策の失敗によって失業、物不足に苦しむ大衆層の不満は、イスラーム勢力に吸収されていったのである(福田 1991、アーシュロン 2002, 私市 2002, 2004.参照)。

「私は言語現象を根本的に重視するものである(Fanon 1952:13)」とファノンは言っていた。FLNに参加後、FLNの広報担当者として機関誌『エル・ムジャヒド』に（フランス語で）記事を書くときに「われわれアルジェリア人は」とアルジェリア人を自称し、知人にも同様の語り方をして当惑させていたファノン(Juminer 1962)は、彼が重視すると言った言語の問題にどのように向き合っていたのか。民衆の多くがフランス語を理解しないアルジェリアで、実質的に植民地支配者の言語のみを用いる自らの位置をファノンはどのように認識していたのか。問うてみる必要があるだろう。

1. 『黒い皮膚白い仮面』と言語

まず、ファノンが『黒い皮膚白い仮面』において言語について何を語ったのか、あらためて確認しておこう。『黒い皮膚白い仮面』はタイトルが示唆する肌の色の問題からではなく、言語の問題から始まっている。先に引用した文は第1章「黒人と言語」の冒頭である。しかし、ファノンはこの章で本当に言語の問題を語ったのだろうか。

たしかにこの章には、しばしば引かれることでなかば語録のようになっていくつかのテーマが埋め込まれている。たとえば、

³ *Constitution du 10 septembre 1963, République Algérienne Démocratique et Populaire.*

植民地化された民族はすべて一言い換えれば、土着の文化の創造性を葬り去られたために劣等コンプレックスを植え付けられた民族はすべて、文明を与える国の言語に対し、すなわち本国の文化に対して位置づけられる。(Fanon 1952:14)

ただ、こうして切り取れば一見分析的に見えるこれらのテーゼが埋め込まれた第1章は、第5章と同様、まったく論理的には構成されていない。一種の箴言のような形で大上段から切り取った枠組みを提示しながら、具体的な(個人的な)経験がドキュメンタリー風に組み込まれ、さまざまな「思い」があちこちで発作的に噴出する。中村が指摘する「解決の不在(中村 2007: 26)」は、中村が考えたように「第5章から『黒い皮膚』を決定的に隔っている(ibid.)」のではなく、実はこの本を貫く基調である。

1.1. クレオール語の否認

議論の出発点では、ファノン是一定の戦略的方向性を持っているように見える。本国の地方人の方言コンプレックスとアンティル人のクレオール語コンプレックスが対比され、アンティル人の屈折の特異性が示される、という方向性である。

学校で、家庭で、母語であるクレオール語を軽蔑することを教え込まれ、本国でクレオール語訛りを恥じ、「正しいフランス語」を話そうと躍起になること。これは本国のブルターニュ人が母語のブレイス語を恥じるのと同じかもしれない。しかし、実はクレオール語は「ニグロの片言(*petit-nègre*)とフランス語の中間(ibid.:20)」にある。「アンティル人はアフリカの黒人に比べて、より「開化」しているからだ(ibid.)」。

つまり、本国のブルターニュ地方人は、パリのフランス語との関係で「方言」についての劣等意識を持つだけだが、アンティル人は、自らの背後に「文明化していないアフリカのニグロ」を意識しなければならない、ということになる。クレオール語は「白人ではない」ことを思い出させ、彼が無標の存在ではないことを暴露する言語なのだ。

ファノンが言うように、本国の地方人の方言コンプレックスとアンティル人のクレオール語コンプレックスは一見構図は同じである。しかし、ファノンがあえて言おうとしないことは、肌の色と言語の間には決定的な違いがあるということである。肌の色は基本的に交換不能だが、言語はしばしば完全に交換可能である。ファノンはこの比較の構図を「ブルターニュ地方人は白人によって文明化されたとは思っていないからだ」と結ぼうとするが、そうではなく、ブルターニュ地方人はパリのフランス語を完全にマスターすれば差異化されない無標の存在になれるが、完璧なフランス語を話すアンティル黒人は、フランス語によって肌の色のスティグマを消し去ることはできないのだ。

そのことがこの章を混乱したものにしている。言語の問題を語っているはずが、結局は肌の色の問題に帰着するのだ。母語のブレイス語にコンプレックスを抱くブルターニュ地方人とアンティル黒人の違いはそこにある。

交換不能の肌の色と交換可能な言語の問題を同じ土台においてしまったために混乱に陥ったファノン、苦し紛れに議論の途中で唐突に奇妙な脱線をして問題の場をずらしてしまう。

なぜアンティル人がフランス語を話したがるのかを理解したい(ibid.:21)

それは、フランス語を自分のものにすればするだけ、より一層「白人に近づく(ibid.:14)」からだったはずだが、奇妙なことにファノンがここで長々と引用するのは、クレオール語の価値を否認するミシェル・レリスの文章である。

フランス語がわからない文旨のみが話している民衆の言語であるクレオール語は、遅かれ早かれ、教育が住民の恵まれない層にある程度広く普及すれば、遺物の仲間に入られることは今から約束されているように見える。(ibid.:21)⁴

第5章においてネグリチュードがサルトルによって「弁証法の弱拍」とされることについては、すくなくとも「最後のチャンスが盗みとられた(ibid.:108)」と抗議のそぶりを見せるのに対して、クレオール語の価値を否認するレリスの議論は、「アンティル人が(クレオール語ではなく)フランス語を話したがる」ことの論拠、つまりクレオール語否認のお墨付きとして提示されている。しかもファノンはさらにこう続け、自らクレオール語の価値否認の根拠を付け加える。

方言で書いているジルベール・グラシアンのような作家がいるとしても、これはまれな例であることを認めなければならない。それに、この種の作品の詩的価値はきわめて疑わしいと言っておこう。これに反し、セネガルのウォロフ語、プル語から翻訳されたものの中には真の作品といえるものがある(ibid.:22)

クレオール語はまがいものしか生み出さないが、アフリカの言語には真正性があるというのである。そして突然「シェク＝アンタ・ジョップの言語学の論文⁵」への関心を示し、「アンティル諸島にはこれに似たものは何もない(ibid.)」と、徹底的にクレオール語の価値を否認する。ブルターニュのパトワとアンティルのクレオール語の対比を行うはずが、ファノンが行うのは、レリスを援用したクレオール語の価値否認なのだ。

⁴ レリスのアンティル諸島調査の報告書の文章 (Leiris 1950)。

⁵ 1948年に第一期『プレザンス・アフリケーヌ』4号、5号に掲載された、後の彼の言語ナショナリズムの萌芽とも言える論文である(砂野 2024 参照)

1.2. 窒息させる「普遍」のまなざし

議論がふたたび錯綜していることにファノン気づく。「諸々の要素を殖やすことを拒みながら、私たちは、問題の中心点を限定していない危険がある(ibid.)」とファノンが弁解するのはそれ故である。しかし、その後が続くのは軌道修正ではなく、追い詰められた獣が咆哮するような、なかば錯乱したことばの連続である。ファノンは自らが提示した問題の周辺を熱に浮かされたようにぐるぐると回り始める。

ところで、黒人に対しては、絶縁の姿勢は誰も救ったためしはない、とっておく必要がある。そして、私は私を窒息させるものから私を解放しなければならない、ということが正しいとしても—というのも本当に私は息ができないのだ—言うまでもなく、生理学的な土台—機能的な呼吸困難—に心理学的な要素—のびのびと感じることの不可能—を移植するのは不健全となる（強調は筆者）(ibid.)

この窒息感、自らの問題を「客観的に」語ってしまう「普遍的な」まなざしを他者が占有し、自らの叫びが虚空に吸い込まれてしまうことへの苛立ちから来ている。ファノンの苛立ちの対象は、普遍的な高みからすべてを語ってしまうサルトルである。第5章でサルトルのネグリチュードに対する「弁証法の弱拍」という規定に動揺するファノンのアンビバレントな感情は、すでにここに表れている。ファノンが噛みつくのはサンゴール編『ニグロ・マダガスカル詩歌集』の序文として書かれたサルトルの「黒いオルフェ」冒頭の次の文である。

これらの黒い口を閉ざす轡を外したとき、君たちはいったい何を期待していたのか。その口が君たちの賛歌をうたいだすと思ったのか。われわれの祖先は、彼らの頭を腕づくで地にねじ伏せていた。その頭が再びもたげられるとき、その眼の中に君たちに対する崇拜の心でも読み取るつもりだったのか (ibid.23)

それに対してファノンはこう叫ぶ。

私の知るところではない。ただ、私は言おう、私の眼の中に、絶えざる問いかけ以外の者を探し求めるものは、視力を失うに違いない、と(ibid.)

「私の口は<黒い口>ではない。それは<人間の口>なのだ。<黒い>という標識を私につけたとき、すでに私は異質なモノとして扱われている」ということだ。第5章では、

それをより明確に言うことになるが⁶、ここではサルトルが無神経に放つ、白人たちの間でだけ共有される普遍的なまなざし（「これらの黒い口を閉ざす轡を外したとき、君たちはいったい何を期待していたのか」）への苛立ちが表明されるだけである。

「ニグロの片言 *petit-nègre*(*ibid.*:25)」で話しかけられることも同じ問題の場を示している。「ニグロの片言」で話しかけられるということは、「お前は黒人である（「ほらニグロだ）」と「もの」として扱われること、肌の色のなかに閉じ込められてしまうということである。裏返すと、「正しいフランス語」、「素晴らしいフランス語」で話すと、「黒人であること」を強調して賞賛されるという居心地の悪さがある。リヨンでの講演の後、「根は、お前は白人なんだよ」と言った白人の友人のことば(*ibid.*:30)も、「今日ただ一人の白人も成しえないような仕方フランス語を操るこの男は、一人の黒人なのだ」というブルトンのセゼールに対する賞賛(*ibid.*)も、「黒い皮膚」をほとんど暴力的に意識させる。「神経過敏症であるといつて責めないでいただきたい(*ibid.*)」というのは、それがファノンを窒息させるからだ（「本当に息ができないのだ」）。

1.3. フランス語の透明化

最後にレリスがふたたび引用されるのは、クレオール語を否認し、フランス語を用いる自らを、あらためて承認するためである。

自らのかかえる屈折、窒息感を否認なしに想起させるクレオール語を否認し、無化するために、ファノンにとってレリスの議論は不可欠だった。「座礁したマルティニック」⁷の拒絶、それは自らを窒息させる癒やしがたい屈辱を想起させるものの拒絶である。ただの「人間」であるためには、それを無化し、葬り去る必要があった。レリスの再引用の後に続く奇妙な一言（「だが黒人たちは私に反駁するかもしれない、ブルトンほどの白人がこのように書いているとしたら、それはわれわれにとって名誉なことではないか、と」(*ibid.*:32))は、自らが白人レリスの議論を後ろ盾としてひとつの欺瞞を行っていることに気づいていることを示している。レリスの議論は「白人になる(*ibid.*:30)」ためのものという負荷をフランス語から取り払い、フランス語を透明化したのである。

そして、どこにも到達しないまま、「言語問題」についてのこれ以上の追求は放棄され、「先を続けよう・・・(*ibid.*)」ということばでこの章は閉じられてしまう。

『黒い皮膚白い仮面』第1章は、言語の問題を語ったのではなく、肌の色をめぐるコンプレックスが言語を通して表れるドラマを語った。そして、そのコンプレックスの契機と

⁶ 「ニグロ野郎！」あるいは単に「ほらニグロだ！」

私は事物に意味を担わせるつもりでこの世界に生まれてきた。・・・ところが私は他の多くのモノのうちのひとつにすぎない自分を発見したのだ(*ibid.*:88)

⁷ エメ・セゼールの『帰郷ノート』は座礁したマルティニックのイメージから始まる。『黒い皮膚白い仮面』から『地に呪われた者』にいたるまで、ファノンの文章はセゼールのことばとイメージに貫かれている。砂野 1984 参照。

なるクレオール語の価値を否認し、フランス語を透明化し、フランス語が否応なく想起させる乳白化願望を埋葬したのである。第5章における身体の問題と同様、克服不能の問題を未解決のまま封印し、ファノンはずでにフランス語普遍主義に踏み出していた。

2. 「アルジェリア人」ファノンと言語

アルジェリアのファノンは、独立後のアルジェリアにおいて重要な問題の一つとなるイスラームとそれにとまなう文章語としてのアラビア語の問題に見事なまでに触れていない。後述するように、ファノンがアルジェリアにおける言語の問題に唯一触れた文章では、なんとフランス語は「解放の言語」として示されることになる。

すでに述べたように、ファノンが代表しているはずのアルジェリア人の大多数は彼のことばを理解せず、彼も通訳を介さずに彼らと直接語り合うことはできなかった。また、アルジェリアの民衆の価値意識の基底にあるイスラームを、ファノンは明らかに軽視していた。ファノンがアルジェリア人民衆の内に見ていたのは、解放闘争の中から生まれ出であろう「新しい人間」としてのアルジェリア人であって、植民地権力の暴力と解放戦争の暴力の狭間に置かれたいま現在を生きるアルジェリア人民衆ではなかった。要するに、フランスによる植民地支配とたたかう、という一点を除いて、ファノンにはアルジェリアの民衆と共有するものはほとんど何もなかった。そういう意味では、ファノンは明らかに「アルジェリア民族」の一員ではなかった。

ナショナリズム研究の泰斗アーネスト・ゲルナーは、エドワード・サイードが『文化と帝国主義』(Said 1993.)においてファノンを被植民者知識人の理想型として称揚することを批判し、次のように言う。

サイードは、ファノンが輸出専門であったことを見逃している。国際レベルでの文学的知的状況ではファノンは確かに影響力があったが、彼はアルジェリア人自身にとっては何者でもなかった。はるかに重要だったのは国際的には無名だったイブン・バーディースであった。アルジェリア戦争は、戦場では敗北したが、国際世論の領域で勝利した。その点でファノンは計り知れない貢献をした。しかし、彼はアルジェリア人の生活や思想の内容については何の貢献もしていない。(Gellner 1994:165).

サイードによるほとんど手放しのファノン称揚があまりにもナイーブなのはたしかである。しかし「何者でもなかった」と全否定するのも誤りである。たしかに、実質的に植民地支配者の言語しか理解せず、カトリックの素養をもつ無神論者であったファノンは、大多数のムスリム・アルジェリア人にとって異邦人でしかなかった。しかし、ファノンはアルジェリア戦争の中で、そしてアルジェリア・ナショナリズムのひとつの要素として「何者か」ではあった。

2.1. アルジェリア・ナショナリズムとファノン

植民地解放戦争が開始された 1954 年時点のアルジェリアの大まかな人口構造を見ると、ユダヤ系や非フランス人住民を含めたヨーロッパ人が 100 万人弱、約 20 パーセントのタマジグト（ベルベル）人を含むムスリム人口が 845 万人である。ただ、豊かな農地を入植者に奪われ、食べていけなくなったムスリム人口は都市に向かい、都市ムスリム人口は 160 万人に達していた。さらに都市でも仕事はなく、約 30 万人のムスリムが移民労働者としてフランス本国にいた（アージュロン 2002:104-108）。

被支配者の母語は、書かれない口頭言語であるアラビア語アルジェリア方言（アンミーヤ）が約 80%、タマジグト（ベルベル）諸語が約 20%である(Leclerc 2024)。しかしアルジェリアの場合、支配者の言語と被支配者の言語という、ファノンが『黒い皮膚白い仮面』第 1 章で示した二項対立図式とは大きく異なる。被植民者の前には支配者の言語であるフランス語とは別にもう一つの文章語が存在した。民衆の宗教的エトスの基盤となっているイスラームの言語である文語アラビア語（フスハー）である。しかし、フランス植民地支配下で正統派イスラーム教育は周辺化され、大多数のアルジェリア人は、書かれることのない口語アラビア語（アンミーヤ）を話し、文盲だった。教育の機会を得たアルジェリア人は一握りにすぎなかったが、彼らの大多数はフランス語を話し、読み、書く人々だった⁸。

植民地支配によって国境を引かれた地域にしばしば見られるのは、解放運動が形成される時、もともとあったナショナリティが支配を覆そうとするのではなく、植民地支配そのものが新しいナショナル・アイデンティティの枠組みを生み出すということである。アルジェリアの場合も、ファノンが「マニ教二元論の世界」と呼んだ植民地世界の分割は、非ヨーロッパ人、ムスリムとしてのナショナル・アイデンティティの形成につながった。そして、植民地支配に抗するナショナリズムが形成される時、ほぼ共通しているのは、そのナショナリズムを主導するのが、他ならぬ植民地支配者の言語で（そしてしばしばその理念—ナショナルなものへの希求、「作られた伝統」を含め—さえも）教育を受けた植民地エリートたちだったということである。

アルジェリアは、フランス語教育がナショナリズムを育てたという意味ではサハラ以南のフランス領黒人アフリカと共通した条件のもとにあった。ただ、サハラ以南の黒人アフリカと違うのは、ナショナリズムの核は被植民者としての近代主義的ナショナリズムだけでなく、近代に成長した改革イスラームと汎アラブ主義というもう一つの核があり、さら

⁸ 1954 年時点で文語アラビア語を習得していた層はフランス語識字者よりも少なかった。渡邊(2016)によれば、1954 年の時点で 6 歳以上のムスリム男性のうちフランス語識字者は約 10%、アラビア語識字者は約 5%である。後述するように、1931 年にイブン・バーディースらによって設立されたウラマー協会などによるイスラーム教育の普及によって正統派イスラーム教育を受けた層は増加していたが、クルアーンの音読を超えてフスハーを使いこなせた者はこの数字よりはるかに少なかったと思われる。

に、サハラ以南の黒人アフリカにはない言語ナショナリズムの基盤としての文語アラビア語があったということである。

第一次大戦後に展開するアルジェリア・ナショナリズムは、通例、独立を希求する急進派（メッサリ派）と改革派（体制内での変革を追及するフェルハト・アバスおよびウラマー協会）に分けられるが、そのナショナリズムがどの言語で語られ、どのような価値意識を基盤としたかに注目すると、二種の異なったあり方が見えてくる。

ひとつは、フランス語を通して獲得した市民権意識と広い意味での社会主義思想に基づく近代主義的ナショナリズムである。植民地体制の中で、フランス語は、被支配者に屈折を生み出す支配者の言語であるだけでなく、「人間」としての人権意識と社会意識を学び、近代的ナショナリズムを生み出す触媒としての役割も果たした。急進派とされるメッサリ派は在仏の移民労働者を核とした反帝国主義ナショナリズムであり、体制内改革派とされたフェルハト・アバスも市民権意識に基づいて同等の権利を持つ「他者」としての認知要求／同化要求からナショナリズムへと進化していった⁹。

他方、フェルハト・アバスと同じく体制内改革派とされたウラマー協会は、イブン・バーディースらによる植民地化で衰退したイスラーム教育を再生する動きとして始まっており、それは、文語アラビア語教育を通じて汎アラブ世界の中でのワタンとしてのアルジェリア・ナショナリズムを育くむとともに、同時期に展開したムスリム・スカウト運動などを通じて草の根に浸透した¹⁰。

重要なことは、1954年の蜂起を主導し、独立後の権力を握ったのが、フランス語を読み書き話す人々だったということである。

FLNは、一方でウラマー協会などの地道な活動によって培われてきたイスラームアイデンティティ、書かれないアンミーヤ（アラビア語アルジェリア方言）を話す民衆を基盤としながら、社会主義と汎アラブ主義の左派ナショナリズムを掲げる都市のフランス語エリート、半エリートが主導した。植民地宗主国の言語で教育を受け、そのナショナリズムそのものが習得した支配者の言語を通して思想化されたという意味では、アルジェリアのナショナリズムはサハラ以南の黒人アフリカのナショナリズムと共通の問題を抱えていた。宗主国言語で語られる近代主義的ナショナリズムと、宗主国言語を理解せず、その言語で語られる世界観を共有しない民衆との乖離である。『地に呪われた者』で、ファノンが都市に依存する指導部を批判し、農民重視の必要を説いているが、フランス語を話す都市の指導部の限界を理解しながら、ALNの基盤となっている農民、民衆を支えるエートス、すなわちイブン・バーディースらによって耕されたムスリム・アイデンティティを十分理解していなかった。

⁹ アージュロン（2002）、およびペルヴィエ（2012）参照。

¹⁰ 渡邊（2010、2011）および私市（2004）参照。「イスラムはわが宗教、アラビア語はわが言語、アルジェリアはわが祖国」というスローガンがよく知られている。

しかし、ファノンの言う「マニ教的に分割された世界」、農村においては殺戮と強制移住、都市においては拷問と処刑が支配者から発せられる唯一の言語となったアルジェリアにおいて、ファノンの前にあった選択は、このマニ教的世界のどちら側に自らの場を見いだすか、ということに尽きた。そしてその選択は、この非人間的な世界を生み出し維持しようとする者たちの側ではなく、それを打ち倒そうとする側以外にはあり得ない。

そして、少なくともファノンが活動し得た時期は、彼が最初に接触した FLN 指導者であるアバーン・ラムダーンをはじめとして、ファノンと政治的志向を共有する指導者たちがいた。1954 年蜂起の際の宣言では、イスラームを基盤としながらも、民主的、共和主義的方向性が示されていたのである¹¹。また、ナセルの汎アラブ主義に傾倒し、カイロを拠点として FLN の海外指導部を名乗っていたベン・ベッラらと一定の距離を保ち、FLN の基本方針として海外指導部に対する国内の優越を決めたスナム会議を主導したのもアバーン・ラムダーンだった (Abane 2011, Shatz 2024 参照)。ファノンは人間を否定する植民地主義を拒否し、人間的な未来を志向する FLN を選択し、FLN に貢献する同志となったのである。そうした意味でファノンはたしかにアルジェリア・ナショナリズムの一つの流れの中に自らの位置を持っていた。

しかし、ファノンのアルジェリア社会についての認識は、フランス語を自らの言語のように話す彼らとの接触を通じてゆがめられていたと言えるかもしれない。ブリダ辞任後は基本的にチュニジアの狭い FLN 社会から発信し続け、「アフリカ移動大使」として移動し続けたファノンにはアルジェリア社会の姿は見えていなかった¹²。ファノンの「アルジェリア民族」は、彼が持ち得た限られた視野の中でファノンの強烈な構想力を通して作り上げられたフィクションだった。ファノンは繰り返し、農民大衆の重要性を語り、農民大衆との接触を失った指導部を批判した。しかし、ファノンはその農民大衆を知らなかった。

2.2. ファノンの選択とフランス語—『こちらはアルジェリアの声』

「人は文化を通して自らの民族を証明するのではなく、占領軍に抗して民衆の行うたたかいの中でそれを示すのである(Fanon1968:154)」とファノンは書いていた。ファノンのこの構築主義的な民族論の例証としてしばしば引かれるのが、『革命の社会学 (アルジェリア革命 5 年)』の「アルジェリアはベールを脱ぐ」と『こちらはアルジェリアの声』である。

¹¹1954 年 11 月 1 日 FLN 蜂起の宣言では筆頭に掲げられた蜂起の「目的」は次のように書かれている。「目的：イスラームの原則に基づいた、主権を持ち、民主的で社会的なアルジェリア国家の回復による民族独立。人種、宗教の区別なくあらゆる基本的自由の尊重」淡 (1972:81)。また、アバーン・ラムダーンについては Abane (2011), Stora(2007), Shatz(2024:212-213) 参照。

¹² ファノンは ALN 兵士たちの戦争神経症などの治療のためにウジャの ALN 基地を訪ねていたが、個としての病んだ兵士たちとの通訳を介しての接触は『地に呪われた者』第 5 章の症例のもとにはなったが、そのこととアルジェリア人農民社会の理解との間には大きな隔たりがある。Shatz (2024:258-314) 参照。

ここで注目したいのは後者である。ファノンが明示的にアルジェリアの言語に言及したほぼ唯一の文章だからである。

この文章は、FLN のラジオ放送の開始が人々のラジオへの姿勢を変え、積極的にラジオ放送を聞き、政治社会情勢に強い関心を示すことで「民族意識」を明確に持つようになったことを新しい「民族意識」の生成の例証として紹介しているが、同時に、それがフランス語に対する民衆の態度の変化もともなっていたことを肯定的な変化として示している (Fanon, 1982:51-84)。ラジオがフランス語で支配者のメッセージを伝える媒体にすぎなかったとき、民衆はラジオにもラジオ放送にも関心を示さなかったが、FLN の放送が始まることでラジオに強い関心を示すようになり、さらには、FLN の放送において「人種主義的でない考え方の表現法としてのフランス語(ibid.:68)」が用いられることで、人々のフランス語への姿勢が変わった、というのである。

フランス語を話す、フランス語を理解するということは、もはや裏切りとか占領者との退行的自己同一化を意味するものではなくなった。革命のメッセージを深みのあることばで伝える「戦士の声」に使われることで、フランス語も解放の道具となった。(中略) 原住民が占領者の言語を事実上引き受けるという事態が起こっているのだ。(ibid.:75)

インフォメーション技術としてのラジオと、可能なコミュニケーションの補助手段としてのフランス語は、殆ど同時的に闘う民族の中に編入されたのであった。(ibid.:77)

フランス語はもはや支配者の言語ではなく、解放の言語となったとファノンは解釈し、彼をよそ者にする支配者の言語の負荷が取り払われる。フランス語は、「人間」解放を担保する「普遍的」な言語としての位置を取り戻し、植民地支配者が与える「文明」の言語であったフランス語は、たたかいの中で「解放の道具(ibid.:75)」となるのである¹³。

レリスを援用することでクレオール語コンプレックスを封じ込めたファノンは、なんの負荷もない透明な言語としてのフランス語を獲得した。その結果、すでに『黒い皮膚白い仮面』において、ファノンは、唾然とするほどのフランス語普遍主義者として語っていた。

「ニグロの片言で話しかけられること」の屈辱を語った後、「理想主義者、と言われるかもしれない。だがそうではない。他の連中こそ下劣漢なのだ。私はといえば、「アラブ野郎(bicots)」に対して、常に正しいフランス語で話しかけている。」と大見得を切っている (Fanon1952:26)。「正しいフランス語で話しかけること」が、フランス語を満足に理解しない植民地出身のアルジェリア人労働者への人間的敬意の印だと胸を張っているのだ。

¹³ ここでファノンは FLN がスンナム会議ではじめてフランス語を公式に用いたかのような説明をしているが、事実と反する。そもそも 1954 年の FLN の 11 月 1 日宣言がフランス語で書かれていた。

『こちらはアルジェリアの声』においては、ファノンが誇らしげにフランス語を掲げるのではなく、かつて自らにも屈折をもたらした「文明化の言語」からその負の価値を消去する。ファノンはフランス語を透明化するのである。しかし、フランス語は農民が用いる言語ではなく、彼らを排除する特権の言語であることに変わりはない。

植民地支配者は、「文明化」の言語としてのフランス語を誇り、「圧政」や「固陋な因習」からの「解放」を歓迎する「原住民」たちの姿を描くことを好んだ。ファノンが示す構図がそれと相似形をなしていることは指摘しておかなければならない。

『こちらはアルジェリアの声』は、それでもファノンが民衆の言語を理解しない自らの位置を意識しないではいられなかったことを逆説的に示している。唯一アルジェリアの言語問題に触れたこの文章は、フランス語を「解放の言語」とすることで透明化するが、同時にファノンの位置の曖昧さを際立たせるのである。

3. ファノンにおける「断絶」、マルティニックの否認

『黒い皮膚白い仮面』においてマルティニック黒人の身体と言語をめぐる袋小路を語ったファノンと、「解放の言語」としてのフランス語を語るファノンの間には明らかな「断絶」がある。

『黒い皮膚白い仮面』から『地に呪われた者』にいたるまで、ファノンが一貫して参照し続けたエメ・セゼールは、『帰郷ノート』において「座礁したマルティニック」から飛翔しようとして挫折し、「おのれの卑劣さ」を直視することで、ネグリチュードを見だし、それを足場にして「より高次の普遍」への展望にいたるが¹⁴、セゼールの足場になったネグリチュードを、サルトルによる「弁証法の弱拍」という規定を受け入れて否認したファノンは、「より高次の普遍」へと跳躍するために（空中にでも）新たな足場を作り出さねばならなかった。

3.1. 「前方への逃避」

しかし、それが足場のない跳躍であったことを、ファノンがチェ・ゲバラとともに若者の反乱と第三世界革命のアイコンとなっていた1971年に、そうした時流にあたかも冷や水をあびせかけるような形で指摘したのが、チュニジア出身で、植民地社会における支配者、被支配者の関係を分析した『被植民者の肖像』(Memmi 1957)の著者アルベール・メンミだった。メンミは「フランツ・ファノンの不可能な生涯」(Memmi 1971)という文章で、ファノンの生を「前方への逃避(*fuite en avant*)」という言葉で形容している。

メンミによれば、ファノンはその短い人生の中で三つの大きな挫折を経験した。1. 海外県に生まれ、自らをフランス人で白人と考えていたが、本国で自らがアンティル人で黒人

¹⁴ 砂野 (1984) 参照。

であることを苦痛をもって見いだした。2. 彼はフランス人でもアンティル人でもあることを拒否し、アルジェリア人であることを決めた（同じく本国に裏切られたではないか）。しかし被抑圧者の連帯も誤認だった。彼はアラブ白人でもムスリムでもなかった。3. そこで彼は、肌の色や文化の偏見のない統一アフリカを建設しようとした。しかし当のアフリカ人たちは、それぞれのネーションを建設しようとしていた。その中でこの「前方への逃避」を完遂するためには、もはや全面的に作り直された世界におけるまったく「新しい人間」を提案する以外の道は残されていなかった、とメンミは総括する。そして次のように結ぶ。「自らの特異性を振り払うことができないことが明らかになったとき、人はあらゆる特異性を否認しようとし、普遍へと逃避する。（中略）ファノンには黒人であることに苦しんだ。被抑圧者はそれに正面から立ち向かうことも、そこから逃げることもできるが、ファノンは後者を選んだ。しかし、ファノンの発作的で性急な政治は、その熱で人を引きつける。ファノンの4番目の挫折は彼の死である。死がすべてを中断し、彼を第三世界革命の預言者にした。ゲバラのように」(Memmi 1971 :273)。

メンミの筆致には何か不快感を感じさせるものがある。『被植民者の肖像』などにおいて植民地支配による植民者、被支配者双方の非人間化を鋭く分析しながら、マグレブの脱植民地化の「反ユダヤ主義」に失望し、その後シオニストとしての姿勢を明確にするようになったこともあり、この文章はファノンに対する嫉妬の混じった悪意の表れとして閑却されがちだが、ファノンの足場のない跳躍を鋭く剔る文章であることは否定できない。

ファノンはレリスの「普遍」を援用してクレオール語を否認し、サルトルの「普遍」に説得されて黒人としての自己肯定を放棄した。自らの内なるマルティニックを否認し、自らを透明化したのである。

3.2. マルティニックの否認—ジェミネとセゼールの証言

この、ファノンによるマルティニックの否認については、それを否定する議論がしばしば見られる。古くは1974年にファノン研究を著したアイリーン・ゲンジアーが、ファノンが『エル・ムジャヒド』の記事で1959年のマルティニック暴動をフランス植民地主義の終焉への動きとして紹介していること¹⁵などを引いて「ファノンが自らの故郷への関心を完全に失ったという批判は誇張である」としている(Gendzier 1974: 9)。また、最近ファノンの伝記を書いたアダム・シャッツも、とくに根拠は示さず、ファノンはマルティニックの同胞を捨てたことはないと断定している(Shatz 2024:429)。たしかに、1958年の西インド連邦の成立や1959年のキューバ革命は、ファノンにアンティル諸島における政治変革の可能性を感じさせたかもしれないが、『プレザンス・アフリケーヌ』のファノン追悼号でグアドル

¹⁵ “Le sang coule aux Antilles sous domination française” 5 *El Moudjahid*, No 58, du 5 janvier 1960.(Fanon 1972 :191-193)

ープ出身の友人ベルテヌ・ジェミネが伝えるエピソードは、むしろマルティニックに対するファノンの冷ややかなまなざしを感じさせるものである。

1958年にチュニスで会ったとき、彼は私を冷やかに迎えた。「で、アンティルとギアナでは、君たちはまだ〈政治〉をやっているのかい？近いうちにフランスは君たちに独立を押しつけることになるさ。それはアルジェリアのおかげだよ。フランス植民地帝国が忌み嫌うアルジェリアのね！」(Juminer 1962:126)

そして、1959年末のマルティニックの暴動で数人が警察に殺されたという報を受けてジェミネがファノンに会いに行くと、ファノンは上機嫌でこう言ったという。

仲間の死骸を集めて腹を割き、トラックに乗せて市街をめぐってこう叫べばいいんだ。「これが植民地主義者のやったことだ」、と。しかし彼らは何もしない。なにかもっともらしい決議をあげて、惨めな暮らしに戻るんだ。(ibid.)

他方、同じファノン追悼号でエメ・セゼールも、マルティニックに帰還し得なかったファノンを悼んでいる。セゼールは言う。

彼を理解する必要がある：彼の怒りは倫理的なものだった、彼の方法は無私無欲だった。彼は一つの大義を支持したのではなく自らを捧げたのだ。すべてを。(中略)

ファノンの死によってその人生を考察することが可能になる。その叙事詩的な側面も悲劇的な側面も。

叙事詩的であるのは、その自由の騎士としての生涯を貫いたことであり、自らの人間としての特異性をはるかな高みから見下ろすことで、〈普遍〉の戦士として死んだことである。

悲劇的なのは？それはおそらく、このアンティル人が自らにふさわしいアンティルを見出せず、自らの同胞から孤立していたことである。ファノンは自らを欺くには明晰すぎ、自ら自身の人民、自ら自身の国を通して、正義と自由の大義を全面的に、絶対的に、つまり彼に可能な唯一のやり方で、わが物とすることができないことに苦しまないためには、繊細にすぎた。(中略)

ファノンがあればほどの高みに達し、あればほどの広大な視野を持てたのは、おそらく彼がアンティル人だったから、つまりあればほど低劣で、狭小な基盤から出発したからなのだ。(中略) 要するに、あればほどのエネルギーで、行動によって無力さから逃れ、友愛によって孤独から逃れようとするためには、アンティル人でなければならなかったのだ。

(Césaire 1962 : 119-120)

セゼールは、ファノンの根源的な希求を、アンティル人であるが故のものとしてとらえている。アンティル人であるが故に、アンティル人であることを徹底的に否認しなければならなかった、ということだ。セゼールは、ネグリチュードを一旦選択することによってより高次の普遍に到達できたが、ファノンはネグリチュードに自らを委ねるにはあまりにも誇り高く、あまりにも普遍主義者だった。セゼールにはそれが理解できた。

ジェミネもファノンは「一足飛びに進んだ」と言う。

自らもついこの間まで疎外された者 (aliené) であった彼は精神科医(alieniste)となり、植民地化された者という、彼の主人である西欧人と同様に心の奥底まで冒された大いなる心の病人を分析することを決意する。その診断はわれわれすべてにとって衝撃的で苦痛に満ちたものだった。「たとえ有色人の兄弟たちの恨みを買うことになったとしても、私は黒人は人間ではない、と言うだろう」。では白人は？白人についての真に精神医学的な解釈に至るためには、ファノンはアルジェリアの恐ろしい現実のなかに身を浸さねばならないだろう。彼は一足飛びに進む (Il brûle les étapes.)。唯一の治療である革命が、疎外された両者を正常な生に連れ戻すだろう。それはアルジェリア人を解放し、ヨーロッパ人を治すだろう。

彼にとっては、ネグリチュードの概念もアラブ主義の概念もすでに過去のものだった。ファノンは第三世界人たろうとする。黒人奴隷の子孫である彼が、祖先が自らの祖先を売ったであろうアラブ人戦士たちの側にいることに人が驚くことに、彼はいつも驚いていた。人を戸惑わせるファノンの逆説的な問題意識はそれだけではなかった。彼は人々の戸惑いに気づいていた。だから、彼は弁明しなかった。歴史が証明する、ということだ。ときにアンティル人をいらだたせた彼の口癖「私はアルジェリア人だ・・・われわれアルジェリア人愛国者は・・・」はそれ故だった。(Juminer 1962:125-126)

ファノンが封印してしまったものは、しかし消えることはない。ファノンは『黒い皮膚 白い仮面』で提起した問題—身体と言語—を乗り越えたのではなく、全的人間／新しい人間という虚構を定立することで、それに背を向けたのである。

4. 結びに代えて—「普遍」の罫

ファノンは、自らを「他者」として排除するヨーロッパ的「普遍」の欺瞞に気づきながら、結局はその「他者性」を引き受けることを回避してサルトルの「普遍」に説得され、さらに被支配者の言語を話す者の疎外を明確に認識しながら、レリスによるクレオール語の価値否認をむしろ積極的に受け入れることで、植民地支配者の言語であるフランス語を透明化してしまった。

『黒い皮膚白い仮面』第1章でファノンが引用し、激しく反発したサルトルの文章（「これらの黒い口を閉ざす轡を外したとき、君たちはいったい何を期待していたのか・・・」）は次のように続く。

ところがここにいるのはすつくと立ってわれわれを見つめている人間たちだ。願わくば私同様、この見られているという戦きを君たちにも感じてほしい。(Sartre 1948:ix)

「黒いオルフェ」において、サルトルは「見つめ返される戦き」を語ったのだ。ファノンは、この直前の文章のみを引用し、黒人を「他者」として規定するまなざしに反発したが、サルトルは一方的に「普遍」を占有するまなざしの傲慢さと一面性を自覚していた。彼は自らが理解しない「他者」によって「見つめ返されている」ことに気づき、戦慄を感じたのだ。ファノンは、サルトルによる「見つめ返される戦き」にではなく、「黒人」を他者として規定するそのまなざしに反応した。ファノンは「世界に意味を担わせること」、つまり普遍的な認識主体として世界に対峙することを望みながら、逆に対象として「認識される」側にいることに気づき、「普遍」の場から排除されていると感じた。しかし、ファノンは自らが問題化した「まなざし」の問題を、言語についてはクレオール語をレリスの「普遍」を援用して否認し、自らの「黒人」としての他者性はサルトルの「普遍」に説得され放棄してしまった。

『黒い皮膚白い仮面』以降のファノンは、自らの思考を、身体を捨象し自らを透明化して展開した、としか言いようがない。アルジェリアの、アフリカの、世界の、人間の解放を語る時、ファノンは透明な思考主体となっている。しかし、それは一方的に「見る」主体としての思考であり、「見られる」客体としての自己の不在を意味する。たとえば『革命の社会学（アルジェリア革命5年）』の「アルジェリアの家族」を読むとき、一方的に見る主体としての、自己を疑わない人類学者のような「客観的な」記述に驚かされる（Fanon 1982 参照）。彼が理解しない言語のなかで生きる他者の不透明さへの畏れの不在、すべてを理解し、解釈する不遜さは、まさに「普遍」の側に自らを位置づけるまなざしである。

ファノンはベン・ベッラをはじめとする都市のナショナリストによる上滑りなアラブ民族主義と社会主義独裁志向を厳しく批判する一方で、農民への過剰とも言える信頼を繰り返し表明しているが、それはアバーン・ラムダーン謀殺後明瞭となっていくFLN指導部の権力志向と内部抗争への失望の裏返しだったのかもしれない。ファノンは農民の宗教的エートスも、それを内包する彼らの言語も理解しなかった。つまり農民大衆を知らなかった。知らないからこそ理想化することができた。というよりも、全存在をかけて自らを投じたたたかいが、掲げられた大義を裏切り始めていることに気づく中で、唯一その埒外にあった農民に理想を託すしかなかったのかもしれない。

「各世代は、相対的な不透明さの中においてそれぞれ自己の使命を発見し、その使命を果たし、ないしはそれを裏切ることになる」とファノンを書いていた(Fanon 1968:141)。

ファノンは、1950年代後半の、アフリカの脱植民地化の不透明な濁流の中で格闘し、進むべき方向を示し続けようとした。ファノンは、人種主義が被植民地化された主体の人間存在のリアリティをどのように歪め、普遍性の占有を無自覚に盲信するヨーロッパ的普遍主義がいかにかんざした自己像を抱いているかを示し、ヨーロッパ的普遍主義のいびつさをヨーロッパに逆照射した。そして、植民地支配が人間性を否定する暴力以外の何ものでもないことを示し、植民地支配の暴力が、反植民地闘争の暴力を生み出すメカニズムを明示した。

しかし、ファノンの構築主義的な民族論や解放闘争による個人の因習からの解放に関する議論は多分にロマン主義的な物語としての側面を持っていた。たしかにそれは社会主義的未来を希求していた同時代の多くの人々と共通の理想だった。ただ、アフリカにおいては、それは多くの場合、植民地支配者の言語を通して紡がれた理想にとどまり、植民地支配者の言語を理解しない民衆は置き去りにされた。アルジェリアにおいても同様だった。そしてそれは、サハラ以南アフリカにおいても、アルジェリアにおいても、現在につながっている。

『プレザンス・アフリケーヌ』と言語の問題について論じた拙論(砂野 2024)で、『プレザンス・アフリケーヌ』に集ったアフリカ人知識人たちが、いったん自らの他者性を掲げながら、結局はフランス語世界の内側にとどまり続け、フランス型の(自らを唯一の視点とする)普遍主義の同伴者となってしまった、ということを書いたが、サンゴールら『プレザンス・アフリケーヌ』知識人を批判したファノンも、フランス語で「より高次の普遍」を求め、「新しい人間」を語り続けることで、結局は同じ道を歩いたのである。

ファノンは、脱植民地化の奔流の中で、彼の視野に入る限りの世界を全力で理解しようとし、その中で自らの使命を見だし、それを徹底的に生きた。「われわれの歴史的使命は(中略)血の中についで去り没し去ったあらゆる企てに、秩序を与えることだ」(Fanon 1968:142.)とファノンは言い切ったが、彼自身も「相対的な不透明さの中」にいたことをいまわれわれは知っている。ファノンは彼の時代の中にいる。時代を超えた預言者として正典化し、「普遍」化するのではなく、彼自身の時代の中において、彼自身が置かれた位置とともに理解しようとするべきではないだろうか。

参考文献

アージュロン、シャルル＝ロベール 2002 『アルジェリア近現代史』私市正年・中島節子 訳, 文庫クセジュ, 白水社.

- 岡真理、崎山政毅、中村隆之 2025 「討議 人間の全的解放と暴力」、『思想』 no.1210, 22-56.
- 私市正年 2002 「訳者あとがき」, アージュロン, シヤルル＝ロベール『アルジェリア近現代史』文庫クセジュ, 白水社. 177-186,
- 2004 『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』白水社
- 砂野幸稔 1984 「エメ・セゼールにおけるネグリチュードの意識の誕生—『祖国復帰ノート』解釈の試み」、『仏文研究XIV』（京都大学仏文研究室）
- 1997 「エメ・セゼール小論」、エメ・セゼール『帰郷ノート・植民地主義論』平凡社, 191-262 (2004 平凡社ライブラリー版. 219-311)
- 2024 「1950年代『プレゼンス・アフリケーヌ』と言語の政治：未完の脱植民地化と普遍の畏」『スワヒリ&アフリカ研究』(35), 136-156
- 淡徳三郎 1972 『アルジェリア革命—解放の歴史』刀江書院.
- 中村隆之 2007 「フランツ・ファノンとニグロの身体 —「黒人の生体験」再読」、『関連社会科学』(17), 18-34 (中村隆之 2022 『環大西洋政治詩学—20世紀ブラック・カルチャーの水脈』人文書院, に再録)
- 2025a 「訳者解題」『思想』 no.1210, 8-9
- 2025b 「暴力の解体—ファノンの根本的再読のために」『思想』 no.1210, 91-111
- 福田邦夫、1991 「イスラームと民主主義—アルジェリア社会主義の危機」、『平和研究』16巻、63-76
- ペルヴィエ、ギー 2012 『アルジェリア戦争—フランスの植民地支配と民族の解放』渡邊祥子訳、文庫クセジュ, 白水社
- 宮治一雄 1989 『アフリカ現代史 V:北アフリカ』山川出版社 (1978年初版) .
- 渡邊祥子 2010 「1930年代から40年代のアルジェリア・ムスリム・スカウトに見るナショナリズム運動組織の変化—ウラマー協会とPPA-MTLDの抗争との関連から—」『イスラム世界』(74), 67-99.
- 2011 「「アルジェリア・ムスリムのウンマ」の概念形成—帰化問題と政教分離法適用問題に対するアルジェリア・ウラマー協会の見解を題材に」『日本中東学会年報』(27-1), 65-88.
- 2016 「植民地期アルジェリアの教育実践とその背景：一九四八年と一九五四年の人口調査から」『アジア研ワールド・トレンド』58-65.
- Abane, Beläid. 2011. “Frantz Fanon and Abane Ramdane: Brief Encounter in the Algerian Revolution.” In *Living Fanon : global perspectives*. Nigel C. Gibson(ed.). New York, 27-43 .
- Césaire, Aimé 1962 “Hommage à Frantz Fanon”, *Présence Africaine* No. 40, 119-122

- Fanon, Frantz 1952, *Peau noire, masques blancs*, Paris, Seuil (邦訳 1970 海老坂武、加藤晴久訳『黒い皮膚・白い仮面』、みすず書房)
- 1968, *Les damnés de la terre*, Paris, François Maspero, Première édition, 1961 (邦訳 1969 鈴木道彦、浦野衣子訳『地に呪われたる者』、みすず書房)
- 1972 *Pour la révolution africaine. Écrits politiques*. Paris, Éditions La Découverte, Première édition, 1964 Paris, François Maspero. (邦訳 1984 北山晴一訳『アフリカ革命に向けて』、みすず書房)
- 1982 *La sociologie d'une révolution (L'An V de la révolution algérienne)*, Paris, François Maspero, Première édition, 1959(邦訳 1969 宮ヶ谷徳三、花輪完爾、海老坂武訳『革命の社会学』、みすず書房)
- Geismar, Peter 1971 *Fanon*, New York, The Dial Press.
- Gellner, Ernest 1994 *Encounters with nationalism*, Oxford, Blackwell.
- Gendzier, Irene L. 1974 *Frantz Fanon, A Critical Study*, New York, Vintage Books.
- Juminer, Bertène 1962 “Hommage à Frantz Fanon”, *Présence Africaine* No. 40, 125-129
- Leclerc, Jacques. 2024. « Algérie », L'aménagement linguistique dans le monde, site internet ([https://www. https://www.axl.cefan.ulaval.ca/afrique/algérie-1demo.htm](https://www.axl.cefan.ulaval.ca/afrique/algérie-1demo.htm)) (consulté le 17 août 2025)
- Leiris, Michel 1950 “Martinique, Guadeloupe, Haïti”, in *Les Temps Modernes*, no.52, 1345-1368
- Memmi, Albert 1957 *Portrait du colonisé, précédé du portrait du colonisateur*, Paris, Buchet/Chastel, (邦訳 1959 渡辺淳訳『植民地 — その心理的風土』三一書房)
- 1971 “ La vie impossible de Frantz Fanon ” , *Esprit*, Nouvelle série, No. 406, pp. 248-273
- Said, Edward.W. 1993 *Culture and Imperialism*, Newyork ,Vintage Bokks (邦訳 2001,2006 大橋洋一訳『文化と帝国主義 1, 2』みすず書房) .
- Sartre, Jean Paul 1948 “Orphée Noir” in Léopold Sédar Senghor, *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache de langue française*, Paris, Presses Universitaires de France, ix-xliv. (邦訳 鈴木道彦、海老坂武訳「黒いオルフェ」、サルトル全集第十巻『シチュアシオンⅢ』所収、159-207)
- Shatz, Adam 2024 *The Rebel's Clinic: The Revolutionary Lives of Frantz Fanon*, Bloomsbury Publishing.
- Stora, Benjamin 2007 “La vie de Frantz Fanon et la guerre d'indépendance algérienne” *Les actes du colloque "Penser aujourd'hui à partir de Frantz Fanon"*, Universités Paris 1 - Paris 7 - Paris 8 - UNESCO - Fondation Frantz Fanon